

「人」

父子

周田美知代

明けましたから最も一昨年の秋、私共は牛込辨天町に移り住みました。其頃私共の移轉と云へば聞えたもので、世間からは何か道樂にてもして居るかの様に、とんでも無い評判をされるともありました。併し私共の方から申せばそれ相當の理由はあります。積りて、絶へず轉し歩く數の中には、一軒や二軒いつ迄もと氣に入つた家のないでもありませんでした。其處には又種々事情もあらうと云ふもの、つまり餘義なくさはれて轉します次第。辨天町の家も其一つで、物靜かな南榎町を大願寺の前から横に曲つて、瓦斯燈の硝子へ銅釜の形を出したいかけやから斜に左手の門構へ、門

を入つて直ぐ横手に、細谷とやさしい女文字の表札をつた格子戸の家があり、兩側に檜の植込を見て、借りようと云ふ家の玄關は正面に奥深く、知人と云ふてはないが、二三度さる席で顔を合した事のある、某大學出の秋山と云ふ男の持家、二階が八疊四疊半とそれれに二疊間二つ、下は茶の間御座敷數臺付玄關下女部屋臺所と云つた造りて、木口は皆ひねくつたものばかりを撰び造作の洒落てる事は先づお茶人向か隠宅か、別に一棟湯殿もある。それで家賃は十八圓、何よりも嬉れしいのは眺望がよくて閑靜な事、一通り話を纏めて早速見つけろいに出掛けて見ると、植込の檜をチャ

キリチャキリ缺て以て手入れしながら、一寸々此方を氣にして、眼の鋭い。けれ共白い髻の長く美しい老人が居まして、私は初め細谷とやら前の家の御座たらう位に思つて、其積りに唯會釋した計りて過ぎようとししました。と、もしと呼びとめ、

「貴下かね、這度此處へ越して来よう云ふのは、それじや敷が三月分りりますぞう、秋山は何と云つたか知らんが、彼は養子じや、私が折合はん、好いかね、敷が三月分りりますぞう。」

秋山との談判には家賃を前金でと計り、敷等と其様した事は少しもなかつたので、變だとは思ひました。最早それく準備もして居る事なり、敷がいりませうと、古風で飾り氣のない其言ひ草が如何にも氣に入つた、尊大な様子もさまで惜いとは思はず、多少の損はあるけれど、這度目移す時に世話がなく、吾々の様を遣りつ放しの、貯蓄心のない者にはけつ便利かも知れぬと云ふので、丁度手許に金があるのを幸私は何も云はず、先方の云ひ目に従ひました。

移つて見ると思つたよりも尙一尙物静かだ、只時折遠く禎町をはやして行く廣告屋の幽かな樂隊を聞きつけ、おもてを通る館屋の唐人笛にあわて、此處彼處

の呂地口から溢れるやうに駆け出す小供連や、女中共の下駄の音カラコロと、笑聲に交つて聞える計り、私には其都度云ひしらぬ物懐しさを覺えるので、静かに物を考へ書物を読みにはうつてつけの土地です。私は書を齋を二階の四疊半と定めましたが、東北に向つて關口から眼白臺を望み、稍色づき染めた森の景色の美しさ窓の障子はすつかり硝子張りになつて居て、目の下の芋畑を隔て、恰度正面に建てられた二階の八疊らしのいに、二十一の書生が二人机を並べて、早稲田邊りへ通ふのでせう、盛に新體詩を朗讀するやら、議論を初めるやら、細かな談話は解りませんが、偶には鍋のお汁を蹴覆す等の喜劇を演じて、如何やら自炊して居る様子、吾々も曾て彼の時分には親友且君と二人、原町に家を持つて彼様した愉快な生活をしたもので、勿論今日迄も變らぬ友情を續けては居ますけれど、何と云ふても樂しかつたのは矢張り彼の時分、私はいつそ若い二人が妬ましい様な氣もします。次ぎの間の八疊は眞西を受けて居ますから、天氣の好いよく晴れた日なぞ、障子を開けると座つて居る富士の高嶺があざやかに見えます。何方かと云へば些と奇麗過ぎて秩父榛名等の連山が宛ら屏風を立て廻した様な森嚴な

山らしい趣はありませけれど、如何にも形よく繪にも見られぬ美しくさは、誰一人讚め稱へぬものもありませぬ。前の家の裏口は私共の切庭と續いて居て此處から座敷の様子を見て居ると中々面白い。家族は母子と老婢の三人限りで、阿母さんと云ふのは何うでも精神病か、てなれば烈しいヒステリトらしく餘程違つて居る。娘は年頃二十か一か、例のハイカつた廂を巾廣の黒リボンで飾つたマガレットに結び、黒眼勝の細面の、眉の邊りに云ひ知らぬ寂しい趣の充ちた美人で、強て云はうならスイトメラソコリとでも申しませうか、始終黄入丈の被布を着流し、殆んど毎夜の様に角帽の書生が大勢出入つて、時には一二時頃迄も夜更しをしますので、起きて出るのは何時も十時を過ぎて、鏡臺の前に座つて寝たれ髪を結び化へ、廂を前にかき出す手つきの器用さは、私は見る度にうまいものだと思ひますので、阿母さんは三度々々魚がなくては不可いと言つて、折節甚くだとをこねますが、其津度娘は「そんな無理云つたつて仕様がな

いじやありませんか、ね阿母さん好い兒だから今朝丈け我慢なさい、今に老婢を買ひにやりますから、ねえ老婢や序に私の分も見て来てお呉れ、伊勢海老でなく

ちや嫌だよ。」と云つた調子で、我儘ではあるが中々しつかりしたもので、多少阿轉婆過ぎると思ふ事のないでもありませぬが、私は全く氣に入つて了ひました。併し近所の評判は餘りよくない方で、前のいかげやのお神さんなんかは別して「何をやつてるんだかお嬢様も聞いて呆れる。」とか何とか、時にはわざ／＼私共の下女を呼び出して「一寸とお前さんお聞きよ、可笑しいじやないかね、昨夜ね私が遅くお湯から歸つてくると其處の横町で、細谷さんがさ、若い男と手を組んで異人じやあるまいし、つるんで歩いてるじやないかねお前さん。こんな事迄云ふんです。而して折々立派な御隠居が訪ねて来ますと、娘は父様と呼びまして、人の噂では狂人の阿母さんは妾だと申すこととす。それで私共では別に他へ轉さうと云ふ氣もなかつたのですけれど、思ひ掛けもなく家主の方で財産争ひを初めた爲、何處へ家賃を拂つて好いのかか解らなくなつたので、委しい事は知りませんが、つまり此家は例の老人の娘、即ち秋山の妻なる者の名義になつて居る云ふ迄も無く法律上秋山に權利があるのです。併し内情を聞いて見ると、娘へ譲り渡しの登記々入後、老人の手で湯殿を建て造作を増し、事實に於て全く双方の

所屬なのですから、私も殆んど始末に困つて友人に話
 しますと、中にはそんな事位何も譯は無、それ程氣
 に入つた家なら家賃等拂はないだつて、大に此喧嘩を
 利用して何時迄も知らん顔して居るさ、等と茶化し半
 分亂暴な事を云つてのける者もありました。仕方が無
 いからいつそ秋山へも老人へも拂はず、月々十八圓づ
 つ家賃あてに銀行の貯蓄へでも入れて置かうかしらと
 も考へましたが、書物を讀んで居てもふと此問題が出
 て来る。と最う無遮苦遮に不快の念が壓へきれなくな
 る、例の窓硝子から書生部屋を覗くと、氣まぎれ處か、
 此様な時には餘計にいら／＼します、でわざと見ない
 やうにして何時も次の間の八疊へ行くのです。
 或日の夕方又無遮苦遮して來たので、八疊の縁側に
 出て暫く富士を見入つた。と前の家で何だか罵る様な
 聲が聞えます、いつに無い事變だと思つてそつと覗い
 て見ると、流石に障子は閉てられて中の様子はしれま
 せん。
 「だつて私……あの父様の御名譽を毀損する様な事は決
 して致さない積りて御座います、け共此事計りは死を
 以て拒まして頂きます。」と少しく震へを帯びては居る
 が落着いた娘の聲で。

「ハイ。」
 「フン好い度胸。」と嘲つて「併し考へて見るが好い、
 お前だつて最う二十越した女だ、少しは行末の事も考
 へてのう美耶、たのむ。」
 「濟みません、けれ共……」
 「けれ共野村は忘れられんと云ふのか、馬鹿奴、梅津
 は子爵だぞ、願つても無い良縁とは思はんか、私はな妾
 腹だからと云ふので世間からお前が馬鹿められぬやう
 にと、甚だに苦しんだと思ふ、馬鹿奴！」
 尙くど／＼説諭して居る様でしたが、聲が低くなつ
 てはつきりと聞えませぬ。二三日後ふと娘を見掛ます
 と、思ひなしか甚くやつれて蒼白めた其色削けた其頬
 は明かに此頃の烈しい煩悶の程を語りますので、私は
 浸々痛々しく感じるのでした。て絶へず娘の事が氣に
 なつて意志を貫すか、柔順しく泣いて悲しい運命に従
 ふか、私は面白い芝居の一幕を見る積りて居ましたが
 一方家主の争ひは愈々激しくなつて來て、終に秋山が
 家を賣物に出す、而して毎日の様に買手を案内すれば
 老人も又黙つては居ない、湯殿を初め自分で建て増し

た箇處は一切毀して持つて歸ると云ふ始末、如何にし
 ても煩はしさに堪へ兼ね、又かと友人に笑はれ乍ら、
 今少して何方かに定らうと云ふ前の家の娘の上も見定
 んず、私は又
 もや移轉し
 て終ひまし
 た。

此作者の技
 倆は前の
 「文壇の花」
 て認められ
 た通りで、
 兎に角作家
 の素質は具
 はつてゐる
 此作見つけ
 處も面白く
 描寫も念入
 だが、筋を
 叙し事を描
 くことが主
 になつて、
 存外人間が
 活きなかつ
 た、中心に全力を入れたかつた爲に、面白くは讀まれても、後へ殘
 る印象が弱い、成程世間には斯んな事もあると思はしめるが、斯
 んんな人もあらうと思はしめる處で一二段落した(評)